

CAMK コレクション展 Vol. 7

「未来のための記憶庫」関連イベント

トーク&ワークショップ

「記憶庫から記憶を引き出してみる」

日時	2023年4月29日(土) 14:00-15:00
場所	熊本市現代美術館 ギャラリー1・II
司会	佐々木玄太郎(本展企画担当者/熊本市現代美術館主任学芸員)
参加スタッフ	岩崎千夏(熊本市現代美術館副館長) 坂本顕子(熊本市現代美術館教育事業班主査・学芸員) 富澤治子(熊本市現代美術館主幹兼主査・学芸員)



展覧会場入口

CAMK コレクション展 Vol. 7

未来のための記憶庫

会期 2023年4月29日(土) - 6月25日(日)

会場 熊本市現代美術館 ギャラリー1・II

■はじめに

佐々木 みなさんご来場ありがとうございます。

本日のイベントは「記憶庫から記憶を引き出してみる」ということで、作品にまつわるいろいろな記憶をみなさんと共有するために企画をしました。

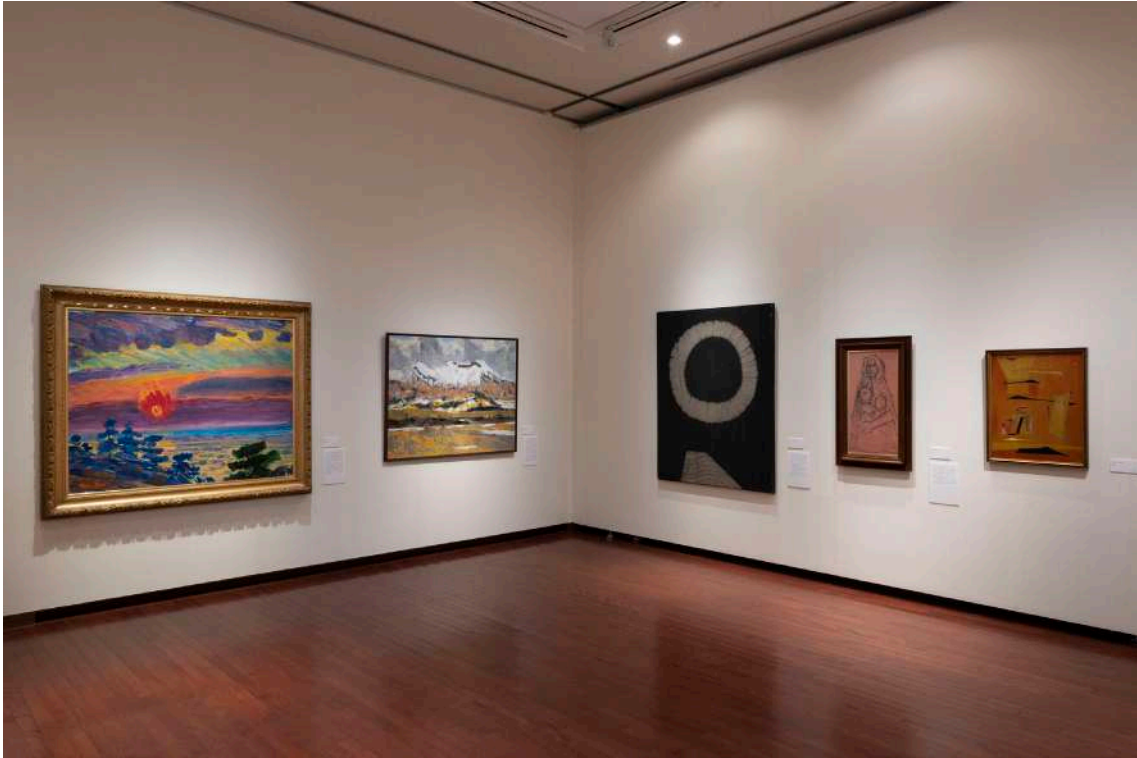
昨年、熊本市現代美術館は20周年を迎えましたが、今回の「未来のための記憶庫」展はこの20年あまりの活動のなかで当館と熊本の地が積み重ねてきた文化的記憶を、コレクション作品約60件をとおして振り返り、また次の世代にも伝えていこうとするものです。現代美術館というのは、自ら展覧会を企画しながら、同時代の作家たちとともに時代の最前線に立ってさまざまな表現を切り開くことに努めています。それと並行して、そこで制作された作品を収蔵していくことで、その成果をコレクションの形で蓄積することにも取り組んでいるわけです。

今日は学芸員をはじめとする当館スタッフも参加してくれているのですが、彼らはそれぞれの作品について制作当時や展示当時の記憶を持っていますし、また来場者のみなさんのなかには「この作品、前に展示されていたときに見た!」という方もきっとおられるかと思います。ですので、このイベントのなかでは、この展覧会のときにどんなことがあったとか、この作品を最初に見たときにどんなことを思ったとか、それぞれが持っている作品にまつわる記憶というのをシェアしていただければと思っています。一般的な作品解説ツアーの場合だと、作家の経歴や作品の分析、時代的な位置づけなどの話になりがちですが、今日は個人の視点からのお話を積極的にしていただければうれしいです。

■熊本市現代美術館の設立をめぐる都市伝説(?)

佐々木 最初のゾーンは「熊本の戦後美術」ということで、戦後に熊本の美術の状況をつくり上げていった作家たちの作例を紹介しています。

ここに井手宣通さんの作品を展示していますが、1990年代前半にこの井手さんの作品がご遺族から熊本市へと寄贈されたことがきっかけで、熊本市での美術館設立の話が動き出し、当館のオープンにつながったという経緯があります。ちょっとここで、当時のことを知っている当館の副館長から、美術館オープンの前後の話をしてもらおうかなと思います。



「熊本の戦後美術」パートの会場風景。一番左が井手宣通《東海旭日》(1985)。

岩崎 こんにちは、副館長の岩崎千夏といたします。

井手さんの作品が熊本市に寄贈されたときは、私自身もまだ財団¹の職員ではなかったのですが、当初は熊本城の敷地のなかの建物を井手宣通記念館にしようかという話もあったようです。しかし地盤調査などでその案は難しいことがわかり、再考されることになりました。

そのときに再開発の計画が進んでいたのがこの熊日会館のビルなのですが、その再開発に熊本市も加わってほしいという話がちょうど来ていたんですね。そうしてここに市の美術館をつくるという流れになり、私が就職する前の年度に、市議会で当時の市長が「熊本市の中心地に現代美術館をつくります」ということを表明しました。私も当時のことはよく知っているわけではないのですが、「この古風な熊本市になぜ“現代美術館”？」とみんな思ったようです。真相はわかりませんが、「“現代の美術館”をつくる」と答弁する予定が、市長がうっかりして「“現代美術館”をつくる」と言ってしまった、という都市伝説のような噂もあります(笑)。市の美術館を“現代美術館”にしたことの一般的な説明としては、熊本県立美術館が近代までをカバーしているので、それとの棲み分けということだと思っております。

佐々木 90年代半ばの話ですね。“現代の美術館”と“現代美術館”では意味が違ってきてしまいますが(笑)。ともあれその後、2002年に熊本市現代美術館が開館することになりました。次のゾーンは「同時代作家との伴走」ということで、当館の企画において発表された同時代作家の作品群を展示しています。

■ 開館イベント「ラスト・サマーナイト」と灼熱の記憶

佐々木 こちらの林浩さんの《Past》のシリーズは、当館の開館イベントで発表された作品と関連したものです。今はもうない赤レンガ倉庫という場所を会場にした「ラスト・サマーナイト」というイベントなのですが、当時のチラシにはまだ「熊本市現代美術館（仮称）」と表記されています。

こちらの林さんの作品について、当時のことを知っている学芸員の坂本から話をしてもらおうと思います。



林浩 《Past (family version)》、《Past (friend version)》2003 石膏、パネル

坂本 学芸員の坂本顕子です。私は岩崎たちに次ぐタイミングで財団に入ったんですが、当時はまだこの熊日会館の建物は工事中で、私たちスタッフは市役所隣の駐輪場のビルのなかに居候していました。

そのときに、「美術館はまだオープンしていないけどすでに動き出しているんだから、イベントをやろう」とそのときの課長たちが言い始めたんですね。その会場のひとつが、熊本駅の近くの赤レンガ倉庫（熊本合同倉庫）というところでした。すでになくなってしまった場所ですが、そこに熊本の作家を集めて展覧会をしようということになり、それに参加してもらった作家の一人が林浩さんでした。

林さんの作品は、今回の展示作品のように「Past」と書かれた石膏のタイルを地面に敷き詰めたもので、初日はきれいに並んでいるのですが、来場者が会場に入っていくとそれを踏むたびにピシッ、ピシッと割れていき、最終日には石膏の塵になっているというものでした。

そのイベントで何を覚えているかといえば、何とんでもエアコンがなくてすごく暑かったことですね（笑）。会場の監視をしなればいけないので、スタッフが交代で現場につくのですが、みんな「あっつい、あっつい！」と言って。演劇のイベントなどもしましたが、スイカを食べた

り、最終日には作家たちとバーベキューをしたりもしました。肉を買い過ぎて、みんなでタッパーに入れて持ち帰ったという思い出もあります（笑）。
このときの林さんの作品は粉々になって形が消えてしまうというものだったので、その後に改めて同じ石膏タイルを使って、壁にかけての展示ができて恒久保存もできる形の作品を制作してもらい、それを収蔵させていただいたというわけです。



赤レンガ倉庫での「ラスト・サマーナイト」（2001）の展示の様子。
床面が林浩作品。正面壁面は前田信明作品。

佐々木 当時、「ラスト・サマーナイト」のようなイベントの来場者というのは、どんなかんじだったんでしょうか？

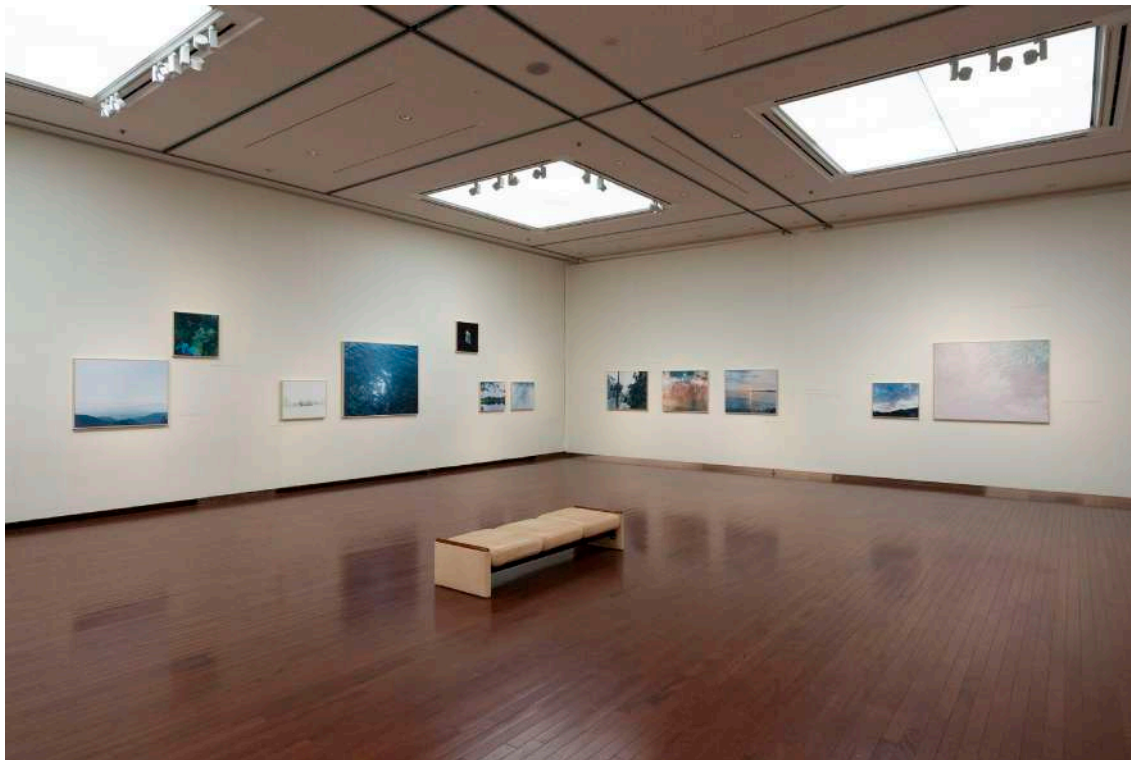
坂本 林さんや他の出展作家さんたちも長く熊本で活動されていて、学校で教えていたりもしたので、けっこうひっきりなしにお客さんは来ていましたね。会期中には音楽ライブや演劇もあったし、美術館じゃない場所で美術の展示をやるということも、当時は珍しかったかもしれません。

【コミッション作品とまちの記憶

佐々木 こちらに大きくスペースを取って展示しているのは、2016年に発表された川内倫子さんの写真作品《川が私を受け入れてくれた》です。当館での川内さんの個展に際して制作され

たいわゆるコミッション作品で、熊本各地の風景を撮影していただいたものです。

ここでは、そのときに展覧会の担当を務めていた、学芸員の富澤に少し話をしてもらおうかと思えます。



川内倫子会場風景

富澤 こんにちは、学芸員の富澤治子です。

いま振り返ると、熊本市民の方々とできたばかりの美術館というものを近づけるためのひとつの方法として、コミッション作品に取り組むということがあったと思います。当館の開館記念展の「熊本国際美術展 ATTITUDE2002」で、私はジュン・グエン＝ハツシバという作家の担当となり、彼とともに水俣をテーマとした作品をつくるという経験をしました。作家と一緒に熊本の人や場所や歴史に触れながら新作の制作を進めて、それがやがて美術館や市民の記憶となっていく、という一連の流れを目にしたんですね。

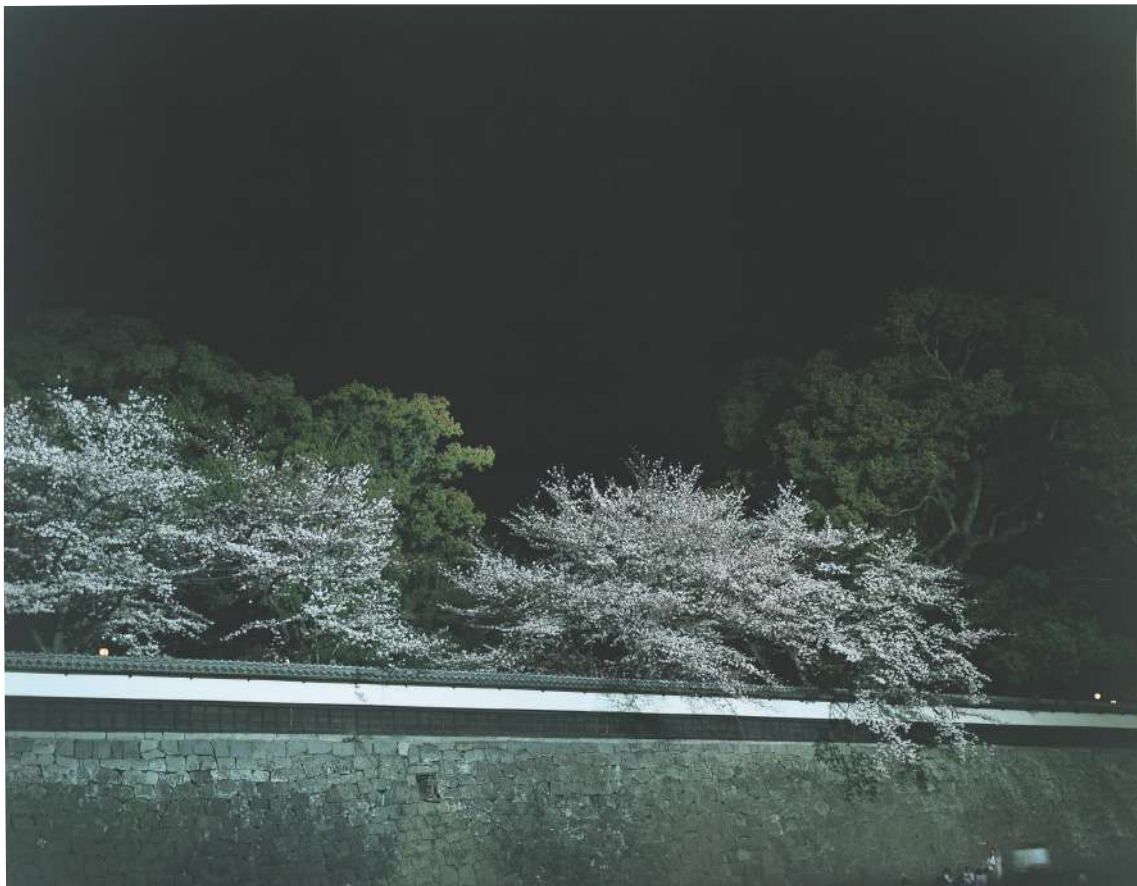
そんなこともあって、川内倫子さんに個展の依頼をしたときにも「熊本の人たちと一緒に作品をつくってもらえませんか」というのを初めにご相談しました。それに対して川内さんからは、熊本の人たちからお気に入りの場所についてのエピソードを聴きたい、というリクエストがありました。熊本の四季を見たい、というのも川内さんの希望にあったので、展覧会が始まる1年前くらいからエピソードを募集しては川内さんに撮影をお願いするというスケジュールを開始しました。

熊本在住の方だけでなく、現在は他所に住んでいるという熊本ゆかりの方も含めて募集をかけて、最終的に38名分のエピソードを採用させていただくことになりました。それらひとつひとつ

つのエピソードにもとづいて、川内さんが熊本のあちこちに足を運び、撮影を進めたというわけです。

この作品は空間全体がインスタレーションになっているのですが、写真だけでなく文字のテキストも含まれています。これらはみなさんの各エピソードから、一行ずつ抜き出してきたものです。これらのテキストを川内さんがリミックスするような形で、現代詩のようにひとつにまとめて、写真とともにセットで構成しています。「鯉を見に行こう」「雲ひとつない青空の日はとくに綺麗です」「夏の照りつける日差しは嫌になる程、痛かった」…と続いていきますが、この全文は「川が私を受け入れてくれた」の作品集にも掲載しています。

この作品は毎回の展示空間ごとで写真とテキストの配置を調整していく必要があり、美術館で用意した空間にあわせて川内さんがレイアウトを指定してくれます。非常に有機的な展示空間となっていて、作品の配置は基本的に変わらないのですが、今回の展示ではテキストの順番が前回から少し変わっています。



川内倫子《川が私を受け入れてくれた》より 2016
発色現像方式印画 ©Rinko Kawauchi

川内展は2016年の熊本地震の直前に開催しましたが、このとき撮影した多くの風景が地震によって変わってしまいました。

たとえば熊本城の長塀ですね。今、長塀自体は復旧されているのですが、その下でお花見をす

ることはできなくなってしまいました。この長堀の写真は、熊本在住ではない方のエピソードを参照して撮影したのですが、現在の実際の風景とは違った、人の記憶のなかの風景となっているといえるのかもしれませんが。また、熊本駅の「0 番のりば」の写真がありますが、熊本駅も近年大きな再開発がおこなわれて姿を変えたので、このような風景もすでになつかしいものとなっています。それから、みなさんご存知の橙書店の写真もありますが、ここに写っているのは新市街の路地裏にあった以前の店舗で、今は練兵町に移っています。

この作品はそうように少しずつ変わっていく熊本のまちの記録にもなっていて、今では私たちの記憶のなかにしかないものと、まだ実際にあるものを行き来しながら鑑賞していくことになりそうです。それもまた写真のおもしろさだと思います。

■ サラリーマン・コレクターの生きざま

佐々木 さて、私が担当した作品や展示についても少しお話ししたいと思います。

こちらは坂本夏子さんという熊本出身の 80 年代生まれの作家の《犬と坂道のアニメーション》という作品です。坂本さんは非常に力のある作品をつくる方で、2022 年には当館の 20 周年記念展にも別の作品群を出展していただきました。



坂本夏子《犬と坂道のアニメーション》2014 シングルチャンネル映像

今回展示している「犬と坂道」の作品 2 点は、久留米の現代美術コレクターの甲斐寿紀雄さ

んという方が当館に寄贈してくださったものです。2019年に当館で甲斐さんのコレクションを紹介する「MY NAME IS TOKYO KAI AND I AM AN ARTOHOLIC」という小企画展を開催して、そのときに私はいろいろとご本人からお話を伺ったのですが、大きな資産を持っているタイプのコレクターでは決してなくて、普通のサラリーマンをしながらコツコツと作品を買い集め続けておられるんですね。格安航空券で東京に飛んでギャラリーをあちこち回り、分割払いで作品を購入する。そしてその支払いが終わりしだい、また次の作品を購入して、常に支払いに追われ続けているという…。調査のためにご自宅にも伺わせていただきましたが、倉庫などを借りているわけでもないのに、生活空間のなかに作品の入った箱があふれているというかんじでした。こんな人が九州にいて、実はすぐ近くで生活していたのかと思い、非常に印象深かったのを覚えています。

そんな甲斐さんが、当館での展覧会の後に自身のコレクションのなかから何点かの作品を寄贈してくれまして、その一部がこの坂本夏子さんの作品というわけです。甲斐コレクションの企画は、一連の展示作品もさることながら、甲斐さん本人のパーソナリティーや生きざまもたいへん興味深く、いろんな形で美術作品と関わっている人がいるんだなというのを私自身も改めて実感した機会でした。

■ 制作に立ち会うことで見えること

佐々木 こちらは写真家の石内都さんが作家の石牟礼道子さんの手足を撮影した《不知火の指》というシリーズ作品です。これも富澤が担当したコミッション作品でして、渡辺京二さんなどにもご協力をいただきながら制作を進め、2017年に当館の15周年記念展「誉のくまもと」で発表していただきました。その後、2018年に石牟礼さんは亡くなられたので、結果的にですが撮影ができる最後のタイミングを捉えた形になりました。



石内都《不知火の指》シリーズ 2014/17、2016/2017 ゼラチンシルバープリント

富澤 石内さんは、撮影するときに「撮影はあまり好きじゃないのよね」と言いながら撮られていたのが、印象に残っています。

石牟礼さんを撮られる際にも、お二人はそれまでにも2回ほどお会いされていたのですが、最初はそれぞれの立ち位置にも互いに気を遣い合うような感じでした。撮影が始まったばかりのときは、2メートルくらい離れたところからシャッターを切っていて、だんだん近づいていき、最後は石牟礼さんがボードの上に手を載せているのを至近距離で撮る、という流れでした。

佐々木 制作の現場に立ち会うと、その作家のコミュニケーションの取り方などいろいろな気づくことがありますよね。

■ 山あり谷ありのマリーナ・アブラモヴィッチ展

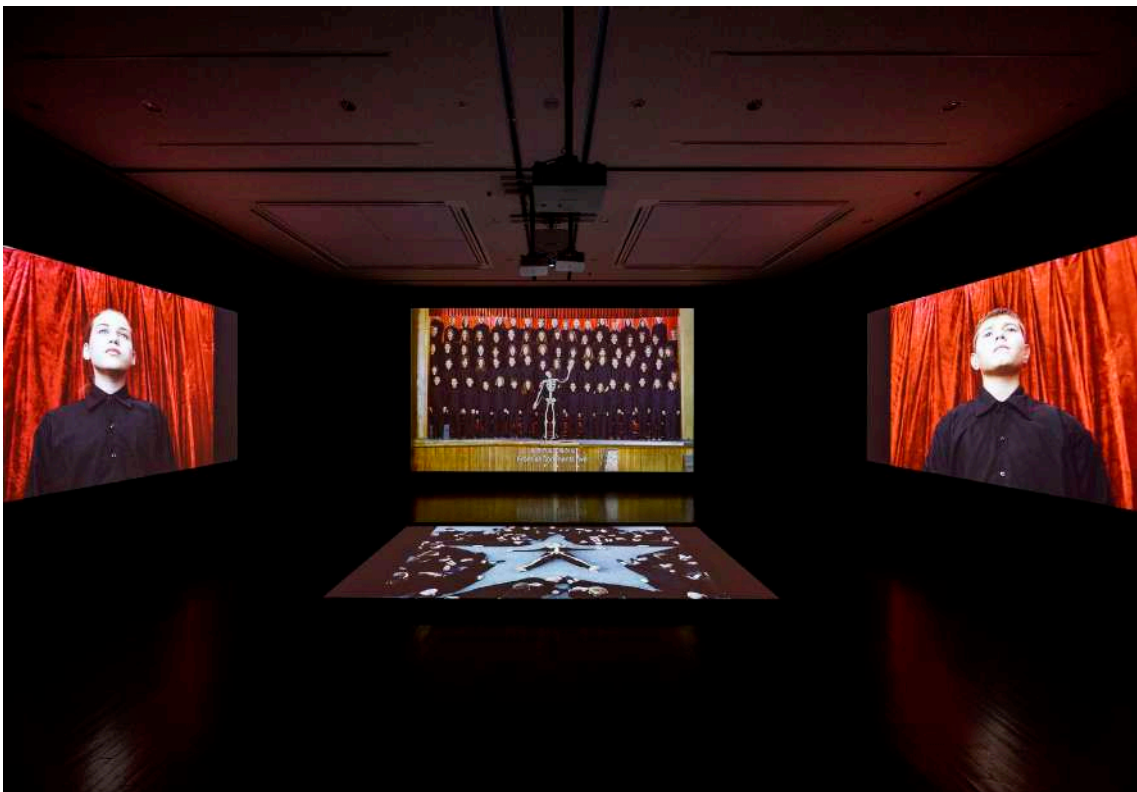
佐々木 さて、こちらは旧ユーゴスラヴィア出身のマリーナ・アブラモヴィッチという作家の《Count on Us》という作品です。

当館では2003年にマリーナの個展を開催したのですが、本作はそのときに当館がリクエストして新たに制作してもらったコミッション作品です。展覧会については、旧ユーゴ出身でマリーナをよく知るボヤーナ・ページという方をゲスト・キュレーターとしてお招きし、当館はオーガナイザーの立場で実施をしました。そして、当時マリーナは26年余り故郷を離れていたのですが、

その故郷のベオグラードの街に戻って、そこで新作の制作に取り組んでほしい、ということを担当館からリクエストをしたんですね。そうして完成したのが本作というわけです。

「Count on Us」というのは、直訳すれば「私たちに任せて」ということになります。本作のなかには、集団と個、国際連合の歌と地元の民謡、集合と離散、共産主義の赤い星と対照的な黒い星、などさまざまな対比が含まれており、重層的な解釈が可能な作品だと思います。発表当時、本作は熊本に大きなインパクトをもたらしたようで、熊日新聞を含めた各種メディアでも多くの記事が掲載されました。

一方で、本作およびマリナー展が完成するまでにはいろいろと山あり谷ありの苦労もあったようです。そのあたりを岩崎から聴いてみようかなと思います。



マリナー・アブラモヴィッチ 《Count on Us》2003 映像インスタレーション © Marina Abramovic

岩崎 なんだか私は暴露話担当のようになっていますが…（笑）。

マリナー展の頃はまだ美術館が開館したばかりでした。今はベテランの坂本や富澤も学芸員として当館に勤務しはじめたばかりだったので、その当時はまだ南畠宏という学芸課長の下で走り回っていました。

この展覧会の準備にあたってはマリナーとの連絡はすべて南畠さんがやりとりをしていたのですが、あるとき、何もかもを一人で引き受けていた南畠さんの頭の中が真っ白になってしまったらしい期間がありました。マリナーからの連絡にもまったく反応ができず、ひと月も放置してしまいました。マリナーはもともと気性が激しい人なので、展覧会の開幕まであと二か月くらいしかない

という状況で、「もうやらない!」と言い出してしまっ。私はそのメールにCCで入っていたのですが、それでも南郷さんは何も言わない。しょうがないので「マリーナ、本当にごめんなさい!」と、下手くそなたどたどしい英語に心だけは込めて必死で謝りました。最終的には「チカのために許してあげる」と言ってくれたのですが…。何だかそんなことがたくさんあった展覧会でした(笑)。

また、来日してもらうための国際線の航空券の手配などもするのですが、イギリス経由で来る予定だったボヤーナが、直前になってイギリスはビザが必要だから間に合わない、と言い出したりして…。ボヤーナも旧ユーゴ出身で、いろんなビザがストレートに取れなかったりしたんですね。ひとつひとつのことに大汗をかきながら、何とか展覧会ができあがっていった感じで、辛かったけれど思い出深い企画です。

佐々木 マリーナ展では作家本人が来熊して、いろいろな交流イベントも開催しました。当館のボランティアさんによるマリーナとボヤーナの歓迎会とか、マリーナと地元の高校生が車座になって対話するイベントとかですね。そのとき私はまだいなかったのですが、記録を見て知っているだけではあります。当時そのような場に参加した方々は、いまも覚えておられるのかな、というのも少し気になりました。

岩崎 そうですね。この展覧会のオープニングには、当時の市長の幸山政史さんが出席してくださいました。そのときにマリーナが、人の顔を粘土に押しつけて、その人のデスマスクをつくるというパフォーマンスをやったんですね。オープニングに出席していた幸山市長と田中幸人館長(当時)の二人は突然パフォーマンスに参加することになり、二人のデスマスクは展覧会場に入ってすぐのところに展示されました。

幸山さんはたぶん顔を粘土に押しつけられるのは生まれて初めてだったので、その後も美術館に来るたびに「あのとき顔を粘土に押しつけられたんですね…」と言っていて、うちの館とマリーナ展のオープニングの記憶が直結したものになっていたようです(笑)。

佐々木 顔を粘土に押しつけられたことがある、という人はなかなかいないですよ(笑)。マリーナ展の記録を見返すと、おもしろい絵面の写真がたくさん残っています。

■ 作品集荷の現場で

佐々木 ここは「九州の作家たち」というパートです。当館は熊本だけでなく九州全域の現代作家の作品を展示し、収集し続けています。

ここでは九州出身作家の大型平面作品をいくつか紹介しているのですが、実は彼らはいずれも、1960年代に全国的規模で巻き起こった「反芸術」という動向と連動しながら、過激な活動でそれぞれに大きな存在感を示した作家たちでもあります。ここで展示している作品はそれ以降

の時代のもので、「反芸術」の嵐の後作家たちはおのこの道で重要な仕事を残しており、その一部が当館の収蔵作品になっているというわけです。



「九州の作家たち」パートの会場風景

こちらの森山安英さんの《アルミナ頌》のシリーズの2点は、私が担当して近年収集した作品です。森山さんは北九州出身で、いまも同地在住の作家です。

森山さんは60年代後半からあらゆる芸術表現を否定して、他の作家やグループの活動に介入して引っ掻き回したり、路上も含めたさまざまな場所で過激なパフォーマンスをおこなったりと、激しい活動を繰り返して、その結果70年代には逮捕され有罪判決を受けることになりました。



森山安英《アルミナ頌 02》1987 頃、《アルミナ頌 08》1989 頃 油彩、樹脂、砂、キャンバス

その後、15年ほど沈黙の時期が続いたのですが、80年代後半から再び制作に向かい始めまして、その最初の作品がこの《アルミナ頌》のシリーズなのです。ここから「絵画とは何か」「表

現とは何か」という森山さんの探求が再出発していきます。

「絵画とは何か」というのは、多くの作家が取り組んできた大きな問いだと思いますが、森山さんはそれを一から考えるために、自分自身の「表現」はできる限り排した形で絵をつくろうとしました。画面の上に砂やモデリングペーストをのせて凹凸をつくり、その上に銀色の絵具を流し込む、という方法で、この《アルミナ頌》は制作されています。筆で絵具を塗っていくのではなくて、画面上に絵具をのせて、画面を傾けることでそれを流していったんですね。そこでは、できあがる形に作家の意図が干渉することは基本的にありません。そのようにして、作家が「何かを描く」という状況をできる限り排そうとしたわけです。銀色を使っているというのも、作家による「表現」を排するための選択といえます。銀色というのは、周囲の環境や光の当たり方によって見え方が変わるものであって、色のようにいてある意味では色ではないとも捉えられます。ちょっとまじめな解説みたいになってしまいましたが、《アルミナ頌》の制作背景はおおまかに言ってそのようなかんじです。

作品を収集するときには、作家のアトリエに作品を受け取りに行きます。で、そのときにも作家ご本人にいろいろと目の前の作品についてのお話を伺うんですね。

この作品であれば、特に砂やモデリングペーストのこと、制作手順のことなどをいろいろ伺っていたんですが、ふと気になって「作品の天地はいまの状態で正しいんでしょうか？」というのをお尋ねしました。すると、制作するときには上にしたり下にしたりして絵具を流しとるからねえ…ということで、ちょっと曖昧なかんじの反応だったんですね。それで後から過去のカタログなどを確認したところ、そのときは天地が逆の状態の作品を見ながらお話をしていたのがわかりました（笑）。作品集荷のときにはそんな場面もありました。

■時代と作家のスタイル

佐々木 今回の展覧会は、前半はけっこう重厚な印象の作品が多いのですが、後半はちょっと雰囲気が変わって、それぞれの世界観を思い切って展開している作家の作品が続きます。

こちらは真珠子さんという天草出身の作家のコーナーです。当館にはギャラリー3という地元作家を中心に紹介している小展示室があるのですが、そちらで2006年に真珠子さんの個展「Ready for Lady」を開催しまして、その出展作の一部を収集させていただきました。

この真珠子展も私は直接観られていないので、坂本から当時のことを話してもらおうと思います。



真珠子展示風景。奥が《ミルクに浸るように眠るためのステージにて》(2006)。

坂本 真珠子展は、^{かなざわ こだま}金澤 韻という学芸員が担当していました。

このベッドの作品《ミルクに浸るように眠るためのステージにて》は、個展の当時は表裏を逆に配置していて、ぐるっと回り込んでいって見るようなしつらえにしていました。館で收藏してからは、正面の配置で展示していますね。

真珠子さんの作品の特徴としては、90年代のガーリーブーム（少女趣味）とのつながりというのが言えると思います。2001年に蜷川実花さん、長島有里枝さん、HIROMIXさんが木村伊兵衛賞を受賞して、それまでアラキーや森山大道さんが撮っていたのとは違うスタイルの、コンパクトカメラでさっと撮るような写真が時代を席捲しました。真珠子さんも HIROMIX さんと同じくらいの世代だと思いますが、そのころから自分のなかの少女性といったものをテーマとして押し出して、制作をしていました。

当館での個展のとき真珠子さんは30歳頃だと思うのですが、いわゆるガーリーブームが終わった後、大切にしてきた自分のなかの少女性と決別して「大人の女性」にならなければいけないのか、自分のなかの少女性とどう折り合いをつけて生きていくのか、ということについて、岐路に立っていた時期なのではないかと思います。

結果として、真珠子さんはいまもこういった作風の作品をつくり続けています。今回ここに展示してある2006年の個展のチラシを見直して、なるほどそういうことかと改めて納得したのですが、このチラシのキャッチフレーズが「“またあとでね。” また戻るための、少女期の装置。」とあります。自分が大人の女性になった後で、改めて自分が大切にしていた魂のようなものに再会していくことができるというのが、真珠子さんの作品の持ち味かなとも思って。今も自身の

スタイルで作り続けておられることに、非常に敬意を感じます。

佐々木 真珠子さんが活動 20 周年を記念して発行された作品集のサブタイトルは、「“娘”を育んだ 20 年」というものでした。そこに掲載された自分史を振り返るエッセイでは、「真珠子」という自身の作家名について、「海の中で育てられる天然のキラキラしたもの」ということなのだと言明されていました。

作家にとって岐路になるようなタイミングで、当館で個展をしていただけたのは、お互いにとって意義深いことだったのかもしれないですね。



真珠子 《さくら&んぼ〜完璧版〜》2006 シングルチャンネル映像

富澤 ベッドの上で流れている映像は、不気味な動きをするアニメーションです。関節の動きとかがとても不自然で、今ではそれはちょっと不気味な雰囲気のアニメーションをつくる時の常套手段になっていますが、個展をされた当時においては、非常に新鮮でした。またクラシックの音楽を使っているところや、ほぼ最初から最後まで手描きのイラストレーションでアニメーションがつけられているところなども印象的です。2000 年代初めごろからビデオ・アートのブームというのがありましたが、そのなかでも突出したものを感じるカッコよさあるいは不気味さだと思います。

坂本 Flash で一枚一枚つくってるんですね。

富澤 本人はアニメーターではないのですが、絵の力やモーシヨンのセンスが非常にユニークです。

■ 異例の短期間で実現させた撮影

佐々木 こちらで展示をしているのはルー・ヤン〔陸揚〕という上海出身の作家の《器世界の騎士》という作品です。当館で撮影した映像を使って制作されたものなのですが、本作にはいろいろと前段階のお話があります。



ルー・ヤン《器世界の騎士》2018 3チャンネル映像

まず当館で2017年に「熊本城×特撮美術 天守再現プロジェクト展」という展覧会を開催しました。「ウルトラマン」シリーズや「ゴジラ」シリーズの撮影のなかで使われてきたようなミニチュア特撮の技術で、熊本城の天守閣とその城下のまちなみを再現しようという企画です。三池敏夫さんという熊本出身の特撮美術監督に指揮を執っていただきながら、ミニチュア特撮のプロフェッショナルから市民インターンまで、多くの方の協力を得ながら実現しました。



「熊本城×特撮美術 天守再現プロジェクト展」(2017-18) 展示風景

で、その翌年の2018年には「魔都の鼓動 上海現代アートシーンのダイナミズム」という上海の現代作家のグループ展を予定していました。ルー・ヤンにはそこでの出展をお願いしていたので、あるとき「ちなみに今うちではこんな展示をやってるよ」ということを伝えたんですね。ルー・ヤンはもともと日本のポップカルチャー大好きな人なので、興味があるかと思ったんです。そしたら「これで作品を撮りたい」という話になって。

ただ、そのときすでに特撮熊本城の展示会期が残りひと月半くらいしかなくて、閉幕したらミニチュアセットはすぐに撤去しなければいけません。ということで時間は非常に限られていて、「やるぞ!」と決めた時点から、撮影計画を立てたりキャストや撮影チームを手配したり、という諸々の準備をわ〜〜っと大急ぎで進めました。そして特撮展が閉幕した次の日にはもう撤収作業を始めなければいけないので、閉幕したその日の晩に徹夜で一気に撮影をおこなったというわけです。できあがった作品は特撮映像として洗練されているかということ、セットのバレなども多々あるわけですが、パワフルさや勢いのすごさは間違いなく感じていただけるかと思います。先ほど川内倫子さんの新作プロジェクトについて、一年以上かけて準備をしたというお話がありましたが、「普通そうだよな…」と思いながら自分も聞いていました(笑)。ともあれ、このときの一連の計画と撮影をとおして、日本とはまた全然違った中国ならではのスピード感を体感したかんじはありました。

「HIGO BY HIBINO」での石垣プロジェクト

佐々木 さて最後は、日比野克彦作品です。日比野さんは現在の当館の館長でもあり、本来なら本人から話してもらうのが一番だとは思いますが、あいにく本日は不在ですので、本人から聞いたことなども交えながら、当館スタッフの方からお話をしたいと思います。

今回展示しているのは、1995年にヴェネツィア・ビエンナーレという美術のオリンピックのような大きな国際展に参加したときに制作された一連の作品で、作家の代表作のひとつといえるでしょう。7点組の作品一式を当館で所蔵しており、今回はそれらをすべて出展しています。

日比野さんは2007-08年に当館で「HIGO BY HIBINO」という個展を開催しまして、そのときには熊本を舞台にさまざまなプロジェクトを展開しました。そしてそこでの出展作を当館ではいくつか収蔵しているわけです。ということで、「HIGO BY HIBINO」の担当だった坂本から当時のことを少し話してもらおうと思います。



日比野克彦展示風景

坂本 「HIGO BY HIBINO」という展覧会は、熊本城の築城400年にあわせて開催しました。大きく二つのゾーンに分かれていて、ひとつは日比野さんがつくってきたダンボール作品などを紹介する、いわば作家のこれまでの作品の“傑作選”のような展示スペース。もうひとつのゾーンでは、熊本の伝統工芸とコラボレーションした作品の数々を出展したのと、さらに熊本城築城400年にちなんで、ダンボールで石垣を組み上げて会期中に完成させるという無茶なプロジェクトをやりました。

ダンボールで石垣を組むなんて、いったいどうやったらできるんだろう…と思いながら毎日石垣をつくって。こんなふうなやり方はどうかな、と思ってやっていたら、日比野さんから「そのやり方じゃだめだ」とか「もっと工夫しろ」とか言われて(笑)。そんなふうで本当にどうしようかと思っていたのですが、いろいろ奇跡が重なって、思っていたより少し短い形にはなりましたが、なんとか展覧会最終日には武者返しが完成したんですね。



「HIGO BY HIBINO」展（2007-08）での石垣プロジェクトの様子

最終日の午後3時くらいに組み上がった石垣の前で、みんなで楽器を演奏したり歓談したりして、その日の午後8時の閉館時には展覧会自体が終わるということで、本当に一夜城みたいなものだったんですが、「あんときは〇〇だったね〜!」とって今でもいろんな人が語り継ぐようなプロジェクトになりました。日比野さん自身もそのような企画をとおして、市民とつながる糸口をつかんできたわけですね。

■ 1995年の状況のなかで

坂本 その展覧会のときにも、今回出展しているこのヴェネツィア・ビエンナーレの出品作は展示されていました。日比野さんが参加した1995年のヴェネツィア・ビエンナーレの日本館では、隈研吾さんが会場構成を担当して、日比野さんほか千住博さんなど計4人のアーティストが展示をおこないました。

ここには関連資料として、日比野館長が昨日持ってきた同展のドキュメント冊子を展示しています。館長の話によると、95年の日本館では自分の作品は空中に吊って展示していた、っていうんですね。どうやってかということ、この大きな作品には細かな風糸がたくさんついていますが、この風糸を使ってネットにくくって吊るしたり、壁に設置したりしていたようです。

これらの作品がつけられた95年というのは、1月に阪神淡路大震災が起こって、3月には地下鉄サリン事件が起こっています。そしてヴェネツィア・ビエンナーレはその後の6月に開幕、というタイミングでした。そのような流れで見えていくと、この日比野作品もどこか不確かさや不安定さを感じさせますし、不穏なかんじのモチーフが連なっています。それらがすごく90年代的

な雰囲気醸し出しているのかな、と思います。

それまで日比野さんは、自分の好きなものなど具体的なオブジェをつくるが多かったんですが、このあたりは社会と向き合わざるをえなかった時代の作品ではないかなと思います。

佐々木 昨日、作品を前にして日比野さん本人もかなりいろいろ話をしてくれました。

95年のヴェネツィア・ビエンナーレ日本館は「数寄」というのを全体のテーマとしていて、そのなかでさらに各作家に「過去」「現在」「未来」というお題が与えられており、日比野さんは「現在」を担当していた、とのこと。そして「現在」というテーマにどう応えるか、と考えてつくっている間に、震災が起り、サリン事件が起り…それらを表現のなかに意図的に反映するかは別として、さまざまに心を揺さぶられる状況のなかでの制作だったようです。



日比野克彦《SUSA》、《NITO》1995 ダンボール、アクリル、色鉛筆、風糸

そしてこれらの作品のモチーフについては、そのような状況のなかで思い出すことや頭に浮かんでくるものを描いていった、と話していました。顔のない赤ん坊であったり、学校の朝礼台であったり…ちなみにこの《SUSA》は、日比野さんが実際に通われていた小学校の朝礼台がモデルになっているのだそうです。

基本的に作品の背景もモチーフもダンボールでできているのですが、《NITO》の一点だけは、モチーフのガスマスクが支持体のダンボールに直接描き込まれています。この作品が一番生々しくて、自分のなかでも消化できていないものを描いている、ということなのかもしれません。日比野さんというとポップで楽しげな作品をイメージすることが多いかと思うのですが、本作にはかなり不穏な雰囲気が漂っています。

ちなみに、制作段階ではもっと多くの作品をつくっていたようですが、実際にヴェネツィアで展示したのはこれらの7点ということでした。

さて、終了予定時間になりましたので、いったんこのあたりでツアー形式でのお話は終わりたいと思います。「実は自分もこの作品を見ていて／関わっていて、話すことがある!」という方

がもしおられましたら、この後でもお声がけいただければうれしいです。
みなさん、本日はどうもありがとうございました。

編集：佐々木玄太郎

註

- 1 「熊本市美術文化振興財団」のこと。現在、熊本市現代美術館の管理運営は同財団が担っている。